

主 題：悩める者の感謝の叫び
聖書箇所：詩篇 9篇

テーマ： 苦しみの中で主に心からの礼拝を捧げること

今朝、私たちがともに学びたい神様のことは詩篇9篇です。

詩篇9篇 指揮者のために。「ムテ・ラベン」の調べに合わせて。ダビデの賛歌

- :1 私は心を尽くして主に感謝します。あなたの奇しいわざを余すことなく語り告げます。
- :2 私は、あなたを喜び、誇ります。いと高き方よ。あなたの御名をほめ歌います。
- :3 私の敵は退くとき、つまずき、あなたの前で、ついえ去ります。
- :4 あなたが私の正しい訴えを支持し、義の審判者として王座に着かれるからです。
- :5 あなたは国々をお叱りになり、悪者を滅ぼし、彼らの名を、とこしえに、消し去られました。
- :6 敵は、絶え果てて永遠の廃墟。あなたが根こぎにされた町々、その記憶さえ、消えうせました。
- :7 しかし、主はとこしえに御座に着き、さばきのためにご自身の王座を堅く立てられた。
- :8 主は義によって世界をさばき、公正をもって国民にさばきを行なわれる。
- :9 主はしいたげられた者のとりで、苦しみのときのとりで。
- :10 御名を知る者はあなたに拠り頼みます。主よ。あなたはあなたを尋ね求める者をお見捨てになりませんでした。
- :11 主にほめ歌を歌え、シオンに住まうその方に。国々の民にみわざを告げ知らせよ。
- :12 血に報いる方は、彼らを心に留め、貧しい者の叫びをお忘れにならない。
- :13 主よ。私をあわれんでください。私を憎む者から来る私の悩みを見てください。主は死の門から私を引き上げてくださる。
- :14 私は、あなたのすべての誉れを語り告げるために、シオンの娘の門で、あなたの救いに歓声をあげましょう。
- :15 国々はおのれの作った穴に陥り、おのれの隠した網に、わが足をとられる。
- :16 主はご自身を知らせ、さばきを行なわれた。悪者はおのれの手で作ったわなにかかった。ヒガヨン セラ
- :17 悪者どもは、よみに帰って行く。神を忘れたあらゆる国々も。
- :18 貧しい者は決して忘れられない。悩む者の望みは、いつまでもなくなるならない。
- :19 主よ。立ち上がってください。人間が勝ち誇らないために。国々が御前で、さばかれるために。
- :20 主よ。彼らに恐れを起こさせてください。おのれが、ただ、人間にすぎないことを、国々に思い知らせてください。セラ

さて、今回の内容を見ていく前に、前回の内容を少し思い返してみてください。前回私たちは詩篇8篇から主に心からの礼拝を捧げることの大切さを学びました。ダビデは、創造主である主の偉大さをいつも覚え、この主の栄光を現す者として生きていく責任と喜びがあると私たちに教えてくれていたのです。皆さん、自分の周りを見渡して、そこにある神様の造られたもののすごさに驚いたり、感動することはあったでしょうか？地上のものであっても、天のものであっても、そこにあるすべての被造物は今もはっきりと主の知恵の深さ、主の力強さ、主の栄光を輝かせています。私たちはそのすばらしさにいつも心をとめ、喜び、主に感謝しながら生きていくことができるのです。

また、それだけではありませんでした。私たちににとって何よりも驚くべきことは、そんなすばらしい世界を創造し、支配されている偉大な神が私たちひとりひとりを特別に扱い、あわれみを示してくださっているということでした。人の頭では到底理解できない美しく壮大な自然を造られた全能の神が私たちを心にとめてくださっている。余りにも小さく無力な私たちのような者に、主は今もあふれんばかりの恵みを注いでくださっている。だからこそ私たちがこうした事実を覚える時、この偉大な主に対して私たちができる正しい応答は、ただ心からの賛美をこの主に捧げることでした。こんなにすばらしい主に心からの礼拝を捧げることができる、これこそが私たちに与えられた大きな大きな祝福でした。私たちはどんな時も、どんな状況にあっても創造主の偉大さを覚え、この主を礼拝する、そんな責任と特権が与えられているのだとダビデは教えてくれていました。

さて、ダビデは今回見る詩篇9篇でも同じように主に礼拝を捧げることの大切さについて教えてくれています。しかし、詩篇8篇と大きく違う点は、彼を取り囲んでいた状況が変わっているということです。この詩篇を記した時のダビデは非常に大きな苦しみの中にありました。皆さんここで少し自分の生活を振り返ってみてください。私たちは今見たように、どんな時、どんな状況にあっても主を礼拝する責任があることを教えられていたのですが、苦しみや試練の中に実際に置かれた時、私たちはどのように主に礼拝を捧げているのでしょうか。希望が見出せないように感じる時、痛みや悲しみが心を支配する時、私たちは主のすばらしさや偉大さに心をとめることができているのでしょうか？また状況を理解できないような時、自分の思いどおりにならない時、今、こうしてコロナを含め健康が脅かされるような不安が私

たちの周りを取り囲んでいる時、私たちは変わらずに主に心からの礼拝を捧げることができているでしょうか？これまでの自分を素直に振り返ってみれば、物事がうまく行っている時は主に感謝していても、絶望のどん底にある時は主を見上げることが難しいと感じたことがないでしょうか？苦しみの中にあつて、神様に感謝を捧げることよりも口から不満や不平が出てくることを恐らく多くの人を経験したことがあると思います。今まさに試練を経験していて、苦しい思いを心に持っておられる方がおられるかもしれません。主を心から礼拝したいけれども、今のこの私の状況ではそれは難しい。もし皆さんがそのようなことを思われるのであれば、この詩篇9篇は大切なレッスンを私たちひとりひとりに教えてくれています。

先ほども言ったように、この詩篇を記したダビデは何等かの困難、深刻な苦しみの中にありました。残念ながら、具体的にそれがどのようなものだったかはわかっていません。ある人は詩篇9篇のタイトルにある「ムテ・ラベン」ということばが「子どもの死」とも訳せることから、ダビデが息子アブシャロムを失った失意の中でこの詩篇を記したのではないかと考えていたりもします。ただし、この「ムテ・ラベン」ということばは訳すのが難しく、単にこの詩篇につけられた曲名なのではないかという考え方もあります。ですからこの考えが正しいかどうかははっきりとわかっていません。

また、この詩篇9篇は次に続く10篇と本来は一つの詩篇であったのではないかという考えもあります。その理由はさまざまあるのですが、この二つの詩篇が共通して同じような言い回し、同じようなことばを用いていること。また通常、文の途中で用いられ終わりに用いられることのない「セラ」ということばが9篇の最後に使われていること。また、あの詩篇119篇で用いられている手法と同じで、この9篇と10篇の文頭にヘブル語のアルファベットが連なって用いられていること。こういったさまざまな理由でこの二つの詩篇はもとは一つのものであったのではないかと扱われていたりするのです。この二つの詩篇が一つであるという考え方に基づいて10:1「主よ。なぜ、あなたは遠く離れてお立ちなのですか。」を見ると、彼が孤独を感じていること、失望や悲しみを覚えている様子を詩篇10篇でも見て取ることができます。ただし、この9篇と10篇が同じだという考えも、この二つの詩篇をよく見比べてみるとテーマが大きく異なっているということで、別々のものとして扱うべきだという考え方もあり、この考え方が正しいのかもはっきりとはわかってはいません。

ただこういったいろいろな考え方がどうであれ、少なくとも私たちがはっきりと言えることは、ダビデが何等かの厳しい試練のうちにあり、死の危機に瀕していたということです。この後でも見ますけれども、9:13に「主よ。私をあわれんでください。私を憎む者から来る私の悩みを見てください。主は死の門から私を引き上げてくださる。」とあります。ですからダビデの置かれていた詳細がどういったものだったかはさて置き、彼は間違いなく自分のいのちが脅かされるような絶望の中に、苦しみの中にいたのです。そんな状況の中で、彼がしていたことは主をほめたたえることでした。彼は自分が苦しい状況に置かれているにもかかわらず、状況に左右されることなく主を見上げ、いつもこの主に感謝を捧げていました。彼は苦しい試練の中にあつても、いつも神にほめ歌を歌うことができたのです。

では一体なぜ彼はどんな時も変わることなく、主に感謝を捧げることができたのでしょうか？一体どうして彼は状況に左右されることがなかったのでしょうか？きょうはそのことを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。そのことを考えていく上で、詩篇9篇には大きく二つのダビデの姿を見ることがことができます。まず一つ目は1-12節の中に、主に心からの感謝を捧げるダビデの姿が記されています。そして次に13-20節の中に、主のあわれみを祈り求めているダビデの姿を見ることがことができます。これから私たちはこの二つのダビデの姿を見、苦しみの中で主を心から礼拝するということが一体どういうことなのかをよく考えていきましょう。そしてどうすればダビデのような礼拝者として私たちは成長していくことができるのかをともに考えていきたいと思います。

A. 主に心からの感謝を捧げる姿 1-12節

まず私たちは前半の部分、1-12節の中で主に感謝を捧げているダビデの姿を見ることがことができます。

1. 主を礼拝することに対するダビデの決心 1-2節

まず1-2節を見てください。ここで私たちは苦しみの中にあつてもなお変わらずに主に礼拝を捧げようとしているダビデの決心を見ることがことができます。1-2節「私は心を尽くして主に感謝します。あなたの奇しいわざを余すことなく語り告げます。私は、あなたを喜び、誇ります。いと高き方よ。あなたの御名をほめ歌います。」とあります。ここで彼は「心を尽くして主に感謝します」、「余すことなく語り告げ」る、「喜」ぶ、「誇」る、「御名をほめ歌います」と五つの異なる動詞を用いて主をほめたたえたいという自分の思いを強く表していました。

この箇所特に注目してほしいことばは、ダビデが「心を尽くして」と言ったことです。ダビデは苦しみの中にあつて「心を尽くして」主に礼拝を捧げていました。要するに主に対する彼の感謝は、彼の心から捧げられたもの、彼の思いや考え、感情といった部分、また彼のことばや振る舞い、態度、それらすべて

てをもって、彼は心から主に礼拝を捧げていたということです。これまで私たちもさまざまな試練を見てきましたが、その中でもダビデは自分の信じている神がどのようなお方なのかをよくわかっていました。1節の中に「奇しいわざ」ということばが出てきていますが、これは詩篇の中でよく登場することばの一つで人々を困難や苦しみから救い出す神の働き、神の贖いのみわざを表すために用いられていることばです。恐らく旧約聖書の中で真っ先に思い浮かべられる神様の救いのみわざは、エジプトの地からイスラエルの民を救い出したことだと思えます。神様のこの働きに対してもこの「奇しいわざ」ということばが使われています。詩篇106：7にも「私たちの先祖はエジプトにおいて、あなたの奇しいわざを悟らず、あなたの豊かな恵みを思い出さず、かえって、海のほとり、葦の海で、逆らった。」とあります。イスラエルの民が、主が紅海を真っ二つにされ、追い迫るエジプトの軍勢から自分たちを守ってくださったことを目の当たりにしたにもかかわらず神を忘れ、逆らったことが言われていました。彼らは神の「奇しいわざ」を忘れてしまっていたのです。しかしダビデはこの主の偉大な贖いのわざを忘れることはありませんでした。彼は昔も今もこの神が変わることなく、人を救ってくださるお方なのだとことをいつも覚えていたのです。だからこそこの主の「奇しいわざ」を余すことなく語り告げたいと彼は望んでいました。

ダビデは、ただ主の行いだけを覚えていたわけでもありませんでした。彼は同時に自分の主がどのような存在なのか、どれほど偉大なご性質を持っておられるのかもよくわかっていたのです。2節の最後に自分の主が「いと高き方」だと書いています。言い換えれば、この方に並ぶ者などいないということです。自分の主がその知恵、力、聖さ、愛、そういったものすべてにおいて優れたお方であることをダビデはよくわかっていたのです。だからこそこの主の偉大さを誇り、心からこの主の御名を喜んでほめたたえていました。私たちがここで覚えておかなければいけないことは、ダビデは苦しみの中にあっても、自分自身のすべてでもって心から主に礼拝していたということです。彼は、今の苦しみに対して神が救いを与えてくださったから、神が不安を取り除いてくださったから主をほめたたえていたわけでもありませんでした。まさに苦難との闘いを経験している中、彼は彼のすべてでもって神に感謝を捧げていたのです。彼の主に対する感謝は状況に左右されることはありませんでした。

では、私たちは一体どうでしょうか？私たちは苦しみの中に置かれる時、心を尽くして主に礼拝を捧げることができているのでしょうか？私たちの感謝は状況に左右されるようなものになっていないのでしょうか？今、皆さんは礼拝をするために礼拝堂に来ていたり、ライブを見るためにそれぞれ端末の前に座っておられるかもしれませんが、からだは礼拝のために備えをしていますが、もしかすると心は自分の思いどおりにならない現実にとらわれて別の方向を向いていたりはしないでしょうか？また私たちは主が自分の問題を解決してくださったその時、あわれみを示してくださったその時はほめたたえるけれども、苦しみを経験しているその真っ最中は、主を忘れて置かれている状況に対して不満を抱いたりはしないでしょうか？もちろん私たちが経験する痛みや試練が大したものではないということを言いたいわけではありません。でももしかすると、私たちが試練に遭う時、私たちは余りにも試練に目を奪われて、その背後におられる神様を忘れてしまっていないでしょうか？

少し考えてみてください。私たちの心をざわつかせるようなことが起こった時に、私たちの心は真っ先に主に向いているのでしょうか？それとも自分自身の身に起こった何かに心がとらわれ続けているのでしょうか？私たちは弱く、すぐにいろいろなものに心がとらわれてしまうような者です。だからこそ不安や恐れ、怒りや悲しみを覚える出来事が生じたのであれば、私は何があったとしても、この主を礼拝すると自分の心に言い聞かせることです。自分の心を騒がせるような出来事に思いを置き続けるのではなく、みずから進んですべてのことを支配されている偉大な主に思いを向けて心からの礼拝を捧げていきたいと。私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちの主は、試練を経験する前も、試練を経験している真っ最中も、試練を経験した後も、いつも決して変わらないお方だということです。そんな方が私たちとともにいつもいてくださる。だからこそダビデがすごい苦しみの中でもこの主を心からほめたたえようとしたように、同じように私たちもこのすばらしい主に対して私たちのすべてでもって心から感謝を捧げる者でなくてはならないのです。

2. 苦しみの中でも揺るがされることなく礼拝できる二つの理由 3-10節

主を礼拝することに対する自身の決意を述べたダビデは、次になぜ自分が苦しみの中で揺るぐことなく礼拝ができるのか、その二つの理由を教えてください。

1) 義の審判者である主が守ってくださるから 3-6節

なぜダビデは苦しみの中で揺るがされることがなかったのか、なぜそのような状況にあっていつも変わらず主を見上げることができたのか、その一つ目の理由がまず3-6節の中に書かれています。それは「義の審判者」である主が守ってくださるからです。3-6節「私の敵は退くとき、つまずき、あなたの前で、ついえ去ります。あなたが私の正しい訴えを支持し、義の審判者として王座に着かれるからです。あなたは国々をお叱りになり、悪者を滅ぼし、彼らの名を、とこしえに、消し去られました。敵は、絶え果てて永遠の廃墟。あ

あなたが根こぎにされた町々、その記憶さえ、消えうせました。」とあります。ダビデはここで主を「義の審判者」と表現していました。彼は間違っていることを正し、悪を必ずさばかれる、そんな主が自分の訴えを支持し、敵から守ってくださるお方だと信頼を置いていました。彼は確信していました。この正しい「審判者」の前では、私に迫ってくる敵は何もすることができないと。彼らはただおびえ戸惑いながら逃げ出すことしかできないと。必ず主は自分の敵を打ち負かしてくださると。

ダビデは悪者に対する主の勝利が確実なものであることを強調するために、5-6節の動詞をすべて預言的完了形で記していました。この表現を用いることで、まだ実際に起こっていないことを既に起こったこととして言い表したのです。まだ起こっていないけれども、必ずそれは起こる。ということが起こるのかというと、正しい「義の審判者」は必ず国々を叱り、悪者を滅ぼされると。これは主に背いて間違った歩みをしている人々、神の前に罪に汚れたことをしている人々を必ず主は正しくさばかれるということです。また、正しい「義の審判者」は必ず「彼らの名を、とこしえに、消し去られ」と書いてありました。この「消し去られ」ということばは、跡形もなく消滅させるとか、完全に存在をなくしてしまうという意味を持っています。このことばをイメージしやすいものの一つに、ノアの大洪水の場面が挙げられると思います。この「消し去られ」ということばはノアの大洪水の場面でも用いられていました。創世記6:7に「そして主は仰せられた。『わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。』」、7:23に「こうして、主は地上のすべての生き物を、人をはじめ、動物、はうもの、空の鳥に至るまで消し去った。それらは、地から消し去られた。ただノアと、彼と一っしょに箱舟にいたものたちだけが残った。」とあります。神は敵を完全に消し去られる。まるですべての生き物が洪水によって、世界から跡形もなく消し去られたように、神に逆らう敵は神の義なるさばきによって完全に滅ぼされるのだとダビデは言ったのです。

そしてその結果、6節「敵は、絶え果てて永遠の廃墟。あなたが根こぎにされた町々、その記憶さえ、消えうせました。」とあります。この「記憶さえ、消えうせ」というのは、誰ひとりとしてその存在を覚えている者はいなくなるということです。人の記憶から消し去られてしまうと。その時はどれだけ巨大で力や富があり、世の名声を欲しいままにしているような者たちであったとしても、主に逆らって主に滅ぼされるのであれば、その繁栄は神の前に完全に忘れ去られ、誰ひとりとしてその人のことを覚えている者はいなくなると。人間的に見てどんなに強い人でも、主のさばきの前で抗うことは決してできずと。そして主は必ず悪に勝利される、そのことにダビデは確信を置いていたのです。こんな「義の審判者」が自分のことを守ってくださることを彼は知っていたからこそ、苦しみの中にあっても主から心からの礼拝を捧げることができました。

感謝なことは、同じ神がきょうも生きておられ、私たちとともにいてくださるということです。もしかすると、主の前に忠実に生きようとしていることで今まさに不当な扱いを受けたり、ありもしないことで責められたり、難しい時期を経験されている方がおられるかもしれません。また友人や職場の人、家族でも、誰でも熱心に福音を語ろうとして、その相手から変わった人として扱われて悲しい思いをすることもできるかもしれません。正しいことをしているのに、どうして自分がこんな目に遭わないといけないうのだろうと思いついて悩んでいる方もおられるかもしれません。もし、そんなひどい扱いを受けた時、皆さんはそれに対してどのように応答するのでしょうか？そのような自分に対する非難に対して、怒りや憤りを心の中にため込み、もうその人とは話をしたくないと口をきかなかったり、距離を取ろうとするのでしょうか？その人のいないところで悪い思いを口にしたり、陰口やゴシップを流すことでその人に仕返しをしようとするのでしょうか？私たちがそのような苦しみの中でできることは、ダビデのように主をほめたたえることです。私たちの肉は、主をほめたたえることよりも、今起きている問題を自分の力で、何等かの形で相手に報復しなければいけない、自分の正しさを守らなければいけないと言うかもしれません。

しかし、この方が「義の審判者」であるということを知っている私たちは、そのような声に惑わされるのではなく、必ず正しい審判をしてくださる方に委ねて歩むことです。ローマ12:19に「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』」とありました。今私たちはどんな不当な扱いを受けて苦しんでいても、今問題が解決しなかったとしても、必ず主が正しいさばきをひとりひとりに下される。だからその主に、「義の審判者」に信頼して私は主をほめたたえようと。「義の審判者」が私たちに苦しみの中で守ってくださるからこそ、私たちは心からの賛美をこの主に捧げようと。そのようにして歩むことができるのです、

2) 義のとりである主が守ってくださるから 7-10節

次に、ダビデが礼拝できた二つ目の理由が7-10節の中に記されています。それは「義の審判者」である方だけでなく義の「とりで」である主が守ってくださるからです。ダビデは自分のことを義の

「とりで」である主が守ってくださることを知っていたからこそ、苦しみの中でも変わらず主をほめた
たえることができました。7-8節「しかし、主はとこしえに御座に着き、さばきのためにご自身の王座を堅
く立てられた。主は義によって世界をさばき、公正をもって国民にさばきを行なわれる。」とあります。こ
で注目していただきたい表現は、主が「さばきのためにご自身の王座を堅く立てられた」ということです。
この「王座」ということばは主の主権性、支配、力といったものを象徴する意味で用いられています。
つまりダビデはここで、この正しい「審判者」である主は、この世界を支配されている主権者でもある
ということを中心にとめていました。彼は、この主の偉大さをよくわかっていました。私を絶望の中で支
えてくださるこの方は、この世界のすべてを意のままに統一されている。そしてご自分のみこころに沿
ってすべてのものを正しくさばかれるお方だということ彼はよくわかっていたのです。この方が人の
悪事を見ていない時はない。私の痛みや思い悩みも見過ごされることはない。この方は永遠から永遠
までいつも変わることなく正しい報いを与えてくださる、必ずこの世界を公正にさばいてくださるお方
なのだ。ダビデはこんな神に信頼し、すべてを委ねて歩んでいたのです。この神は自分のことを決し
て見捨てることがない、どんな時も必要な守りを与えてくださるという確信を持っていたのです。

だからこそ彼はそんな神を9節でこのように言い表していました。「主はしいたげられた者のとりで、苦
しみのときのとりで。」、言い換えれば、この主は敵に責められて、ぼろぼろになるまで弱り切った者、
また痛みや涙で心が重く、苦しみの中にいる者に必要な守りを与えることのできるお方だということ
です。抵抗する力がこれ以上残されていないような、苦しみでうちのめされたような、か弱く、弱り果て
ている者であったとしても、この主の「とりで」のうちに喜びと平安を味わうことができると。皆さ
ん、これが私たちの主です。こんな主に私たちは身を委ねて歩むことができます。病気を患ってしんど
い時も、ありもしないことで虐げられる時も、先が見えない不安に陥る時も、仕事で失敗した時も、自
分の大切な何かを失った時も、サタンの攻撃を受けて心が苦しむ時も、どんな時であっても私たちは主
の守りのうちを歩むことができます。どんな状況にあったとしても、義の「とりで」である主はいつも私
たちのことを守ってくださる。これはすばらしい希望ではないでしょうか？

でも同時に私たちが覚えておかなければいけないことがここにあります。それはこのすばらしい主の
守りは自分の弱さを認め、謙ってこの主を探し求める者にしか与えられないということです。だからも
し主を見上げるのではなく、自分の知恵や力を頼りにして、己のすべてを主に委ねていないのであれ
ば、そんなあなたにこの主は「とりで」としてともにはいてくれません。ですから、もしきょうこの偉
大な神をまだ知らない方、あなたを目的を持って特別に造られたそんな神に従うことよりも、自分の人
生を自分のために生きておられる、そんな方がいるのであれば、聖書が教えることは、そんなあなたに
用意されているものは主の守りではなく、主の義なるさばきだということです。決して罪を軽く見られ
ることのない、見逃すことのない聖い神様は、必ずいつか罪をさばかれます。そして、主に逆らう者は
きょうもこの詩篇9篇で見たように、確実に必ず滅ぼされます。そして永遠の地獄で罰を受け続けるの
です。どれだけあなたに力があろうと、どれだけあなたが賢くて知恵があろうと、どれだけこの地上に
名声を持っていたとしても、この義なる「審判者」である主の前にはそれらは一切無意味だと。

また、もしかしたら神様のさばきなど私には関係ない、そのようなものは来ないのではないかと考え
る方もおられるかもしれません。しかし、きょうのみことばが私たちに教えてくれていたように、必ず
主の審判が下る日がやって来ます。だからこそきょうという日に、あなたにとって何よりも必要な救い
を心から受け入れてください。これまでの自分の生き方の過ちを神様の前に認めて悔い改めて、あなた
を造られた神様のために生きる人生を始めてください。どうか後回しにはしないでください。あな
なの罪のためにこの地上に来られ、そして十字架の上で血を流されたイエス様を自分の主として、自
分の救い主としてきょう知ってください。あなたのことを愛して、人として来てくださったイエス・キ
リストはこんな約束を与えてくれています。マタイ11：28に「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わ
たしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と。本当の安らぎはこの地上のど
こにもありません。本当の安らぎは私たちの主イエス・キリストのうちにのみあります。ですからこの主を
自分のものとしてきょう受け入れてください。

また主を愛し、主のために生きておられる皆さん、私たちは試練を経験する時、時に主が私たちを見
捨てて遠く離れてしまったのではないかと感じることもあるかもしれません。主が遠く離れてしまっ
て、自分は一人なのではないかと孤独を覚えることもあるかもしれません。もし、そのようなことを感
じることがあれば、この次の約束をいつも思い返してください。ヘブル13：5の中に、「金銭を愛する
生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。『わたしは決
してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。』」と。たとえどんな試練を経験していたとしても、たと
えどんなに激しい人生の嵐を経験し、逃げ場がなかったとしても、追い詰められて苦しかったとして
も、恐れや不安で押しつぶされそうになっていたとしても、この主はあなたの「とりで」としていつも

そばにいてくださる。あなたの目にどれだけ大きく、どれだけ大変な試練に見えるものがあったとしても、私たちの主のあわれみは、私たちの主の愛はどんな問題よりも小さいものではありません。すべてのものに勝る主の愛が、私たちとともにいてくださるのです。私たちはこの主のうちに安らぎを見出すことができます。そのためには、私たちは自分の弱さを認めることです。自分の知恵や自分の力で試練を乗り越えようとするのではなく、この主に信頼することです。私たちにとってそれで十分なのです。なぜならパウロもこう言っていました。「しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」と、Ⅱコリント12:9に記されていました。たとえどんなに苦しいことがあったとしても、主の恵みはあなたにとって十分だと、義の「とりで」である主があなたとともにきょうを歩んでくださると。義の「とりで」が私たちを守っていてくださるからこそ、私たちは心からの賛美を捧げ続けることができるのです。

3. 主を礼拝するようというダビデの命令 11-12節

さて、これら二つの理由を述べたダビデは、1-11節をまとめて、再び11-12節で主に賛美を捧げてこう言いました。「主にほめ歌を歌え、シオンに住まうその方に。国々の民にみわざを告げ知らせよ。血に報いる方は、彼らを心に留め、貧しい者の叫びをお忘れにならない。」と。ダビデは主が「義の審判者」として、また義の「とりで」として自分を守ってくださっていることを覚えていたがゆえに、苦しみの中にあっても変わらずに、主に賛美を捧げ続けることができました。しかし、彼はただ自分だけがそれをすればいいと思っていなかったのです。主のあわれみを自分のうちにだけとどめておけばいいとも考えていませんでした。彼は自分とともに人々が一緒になってこのすばらしい主に向かって「ほめ歌を歌うことを求めていたのです。

私たちも同じです。私たちは同じ主に救われた者同士、神の家族としてさまざまなことを分かち合っていくことができます。もちろん主が自分の上になしてくださったその感謝を分かち合うことも、私たちひとりひとりの上に起こった喜ばしいことやうれしかったことを分かち合うこともできます。しかし、同時に私たちは自分の経験している苦しみや試練、痛みや悲しみ、罪との葛藤、そういったものをも正直に分かち合うことができるのです。私たちはこのようにしてお互いの重荷を担い合いながら、ともに仕え合っていくことができるのです。そして、私たちの上に働かれるその主のすばらしさ、みわざを味わう時に、主は確かに自分を忘れることなくあわれみを示してくださった、苦しみから救い出してくださった、そのようなことを経験する時に、自分だけのものにして誰にも言わないのではなくて神の家族が一緒になって、なんてすばらしい神なのだとか心から感謝することができる。私たちの主はすばらしいお方だと、みんなが声をそろえて言うことができる。私たちはこの主のなされることをともにほめたたえていくことができるのです。

B. 主のあわれみを祈り求める姿 13-20節

ここまで主に心からの感謝を捧げるダビデの姿を見てきました。残りの時間、二つ目の主のあわれみを祈り求めるダビデの姿を見てみましょう。すべてを詳しく見ることはもうできませんけれども、祈りを捧げているダビデの二つの姿勢に注目してください。

◎ 主のあわれみを求めるダビデの祈りの姿勢

1) 自己中心的なものではなく神中心の祈り 13-14節

まず主のあわれみを求めるダビデの祈りの姿勢は自分中心ではなく神中心のものでした。そのことが13-14節の中にこう記されていました。13節「主よ。私をあわれんでください。私を憎む者から来る私の悩みを見てください。主は死の門から私を引き上げてくださる。」、死の危機に瀕していたダビデは、自分にあわれみを示してくださること、そして自分を弱らせている苦痛を取り除いてくださることを切実に願っていました。特にこの「見てください」ということばは、単に置かれている状況をごらんになってくださいと言っているのではなく、主がその苦しみを理解して、そして何かしらの行動を起こしてくださることを強く願っている意味が含まれています。ダビデは悠長に主にあわれみを示してくださいと祈っていたのではなく、余りにも苦しいから今すぐにでも、主よ、私をこの苦しみから助け出してくださいと願っていました。

しかし、彼がこのような祈りを捧げていたのには目的がありました。その目的は続けて14節に「私は、あなたのすべての誉れを語り告げるために、シオンの娘の門で、あなたの救いに歓声をあげましょう。」と記されています。ダビデがあわれみを求めた理由は、自分が抱えている問題を解決できればそれでよしということではなく、自分を助け出してくださった主のすばらしさを、シオンの町に住む同じ救いを得た者たちとともに賛美したいと願ったからでした。苦しみの中にいて死にそうだった彼の願いは、自分の苦しみを取り除くことよりも神を礼拝するところにあったのです。もちろん主にあわれみを求めること、私たちの必要を主に求めること自体が間違っているわけではありません。私たちは私たちのことをいつも

心にとめ、恵みを注いでくださる方に、自分の心のうちを知っていただくことができます。しかし、時に私たちは主に祈り求めることが自分の願いをかなえることだけになっていないでしょうか？特に苦しみの中にある時に、この病気を取り除いてください、人間関係で苦しんでいます、この問題を取り除いてください、今心をざわつかせているその不安を取り除いてくださいと。このように自分の願いがかなえられることだけで終わってはいないでしょうか？ダビデはそのようには祈りませんでした。彼は主よ、あなたの愛に値しないようなこんな者をあわれんでください、でもそれは自分のためではなくて、あなたのすばらしさをほめたたえるためにどうかこの問題を取り除いてくださいと。ダビデはいつも神を覚えて祈りを捧げていました。私たちはこのような姿勢で祈りを捧げているのでしょうか？私たちの祈りの中心は自分ではなく神でなければいけません。

2) 主の偉大さが明らかにされることを願う祈り 15-20節

そして、主のあわれみを求めるダビデの祈りの姿勢の二つ目は、主の偉大さが明らかにされることを願う祈りでした。ダビデは主の偉大さが明らかにされることを願い、祈っていました。15-18節を通して、自分のしかけたわなに自分でかかったり、神を忘れた者たちが死んでよみ——シェオルへと下って行ったり、いかに悪者が愚かで無力な存在であるかを明らかにした後、ダビデは19-20節でこのようにまとめていました。「主よ。立ち上がってください。人間が勝ち誇らないために。国々が御前で、さばかれるために。主よ。彼らに恐れを起こさせてください。おのれが、ただ、人間にすぎないことを、国々に思い知らせてください。」、ここでダビデが言わんとしたことは明白です。この世界を支配されている「義の審判者」である神の偉大な力、聖いさばき、輝かしい栄光の前にはどんな人間も弱く愚かで小さな存在だということです。このような主を覚える時に私たちにできることは、どのような状況にあっても、たとえ苦しみの中にあつたとしても思い上がることなく、謙ってこの主を恐れ、そしてこの主に信頼を置いて心からの礼拝を捧げていくことです。この主の偉大さを自分のうちだけにとどめるのではなく、この主の偉大さをまだ知らない者たちに語り続けていくこと、兄弟姉妹の中でこの主の偉大さを分かち合うことで、この主のすばらしさをほめたたえ続けることを私たちはしていかなければいけないのです。そのような礼拝を私たちは捧げることができるのです。

○まとめ

さて今朝はダビデを通して、特に苦しみの中にある時に、主を心から礼拝するということがどういうことなのかを見てきました。確かに私たちには難しく感じるものがあつたかと思えます。鍵は私たちの主がどのような方かをいつも覚え続けることです。皆さん、思い出してください。無実であつたにもかかわらず自分の愛する家族や財産のすべてを失ったヨブは、苦しみの中で主を覚え感謝を捧げていました。ヨブ1:21に「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」とあります。問題が取り去られたからではなく、自分の主がどのような方かをいつも覚えていたからこそ、彼はこのような証を立てることができました。私たちも同じです。私たちの主は必ず悪をさばき、正しい者に報いてくださる「義の審判者」です。そして同時に私たちの主はどんなにか弱い者に対しても、ご自分を信頼する者に愛を注ぎ、その者に十分な守りを与えてくださる、そんな義の「とりで」です。

ですからどうかこの主を私たちいつも覚えて歩んでいきましょう。たとえ苦しいことがあつたとしても、この主は変わらず私たちとともにいて、私たちのことを見捨てることはありません。ですからこの主をいつも感謝し、心から礼拝する者としてともに成長していきましょう。